

歴史の積み重ねの上に今がある

東アジア漢字文化圏の表現としての令和

中田幸司

文学部国語教育学科 教授

一三〇〇年ほど前の九州・太宰府で、当時、まだ珍しい外来の梅の花のもと大伴旅人（おおともものたびと）によって宴会が行われました。その時の和歌がいまも伝わります。政府は、新元号「令和」が、日本最古のこの和歌が載る『万葉集』を典拠（「てんきよ」・根拠となる文献）だといいます。これまでの元号は漢籍（「かんせき」・中国の文献）からだったのが、今回の改元では日本の古典・「国書」を参考にしたというのです。

日本人ならなんとなく誇らしくなったり、嬉しく感じる人もいるでしょう。でも、その『万葉集』の和歌の直前に書かれている序の部分に「時に、初春（しよしゅん）の令月（れいげつ）にして、気淑（よ）く風和（やわら）ぐ。

梅は鏡前（きようぜん）の粉（ふん）を披（ひら）き、蘭（らん）は珮（へい）後（ご）（はいご）の香（かう）を薫（かお）らす」とあって、それは漢文体で書かれているのです。

原文は「于時、初春令月、気淑風和。梅披鏡前之粉、蘭薫珮後之香」。正月良き時に集えば、天氣に恵まれ、風もやわらかで、梅の花は鏡の前にある白粉のように白く、その匂いといったら、まるで匂い袋のようだ、と宴の日を讚（たた）えている部分です。

漢文で書かれているこの部分はすでに、中国の王羲之による「蘭亭序」や、枕草子にもその名が載る『文選』に表現や発想のもとがあることが知られています。

新元号を国書を典拠と言うよりは、広く東アジア漢字文化圏の表現として、これまで多くの積み重ねの結果であることをもつと意識できるといいですね。例えるなら、昔、有名だった曲のカバーを現代のアイドルたちが出したことをきっかけに、改めて良いと再認識する。そのときにはオリジナルも大切にしたいわけですね。

表面に出てきたものを理解するときに、その背景を想像したり考えたりできる玉川つ子であって欲しいですね。

以上のように中田幸司先生は願うのであります。

